近代日本人が描く「中国」に関する研究

要旨

神戸学院大学　人間文化研究科

地域情報論講座　博士後期課程

徐茜

日中関係は、長い歴史をわたって現在に至っても、両国の対外関係で重要な一部だと考えられている。政治・経済などの要因の以外に、両国の相互認識は、両国関係を大きく影響し、一時期左右さえしている。また、一国の他国認識は、短期間や偶然で形成したものではなく、長い歴史を背景に、様々な事象や情報から徐々に醸成されていくものである。それで、近代における日本人の中国観の研究は、史実の整理においても、現在の反省においても、重要な課題だと考えるべきである。

本研究は、日本と中国の 20 世紀前半の約半世紀にわたる戦争と軍事的大規模紛争の背景に日本人による中国に対する「蔑視」観や「劣等」視する見方があるのではないかという点を問題意識に設定し、当時の民衆に影響を与えたと思われる資料を抽出し、そのなか中国はどのように描かれ、どのように評価されていったかを分析してみた。論文の内容構成は以下の通りである:

序章　　明治前後における中国観の転換

第一章　日清戦争期の戯画が描いた中国

第二章　『日清戦争実記』で報道された中国

第三章　ジョルジュ・ビゴーが描いた日清戦争

～イギリスの画報紙『ザ・グラフィック』を素材にして～

第四章　中国東三省を旅した夏目漱石の眼差し

～新聞掲載紀行「満韓ところどころ」から～

第五章　中国取材に旅立った芥川龍之介の眼差し

～新聞掲載紀行『支那游記』から～

終章　　近代の新聞雑誌からみる日中のまなざし

序章では、明治維新前後の資料を取り上げ、その中から日本人の中国認識の変化を追跡してみた。それを踏まえて、日清戦争期から第一次世界大戦までの状況を把握しつつ、本論で使用する素材について紹介した。

第一章では、戦時読者の人気を博した『時事』、『団珍』および『百笑』を取り上げ、その中の戯画を考察した。『時事』、『団珍』、『百笑』は、それぞれ出版指向が異なるものの、共通して戯画の内容はわりと浅く、題材も単一化する傾向がみられる。「清国は弱い」、「清兵は弱兵」と表現しているところや、清国を弁髪姿や豚のイメージ表現しているところも共通し、いずれも上からの視線で当時の中国を批判していた。それをみた民衆たちも、戯画でのイメージをそのまま受け入れ、人々の間では、清人の弁髪首の姿が展示や商品に使われ、敵愾や嘲笑の対象となっていた。中国の諷刺を繰り返す戯画は、民衆の敵愾感情を高揚させ、さらに中国蔑視感情の形成も促した。

『団珍』や『百笑』は一般大衆に向けた読み物から、『時事』のような大新聞までも、過激なイメージを頻繁に掲載した現象があり、戦争戯画の内容は戦争また敵国に対し冷静さを失ったことがうかがえる。それのため、清国を嘲笑する戯画は単に、一部教養の低い民衆が戦争の雰囲気に流されて楽しんだものでなく、知識人から一般民衆まで、幅広い読者層が楽しむものとなっていた。このような高まった戦争感情は、当時の日本人に普遍的に見られた清国蔑視観の形成にもつながったと考えられる。

第二章では、日清戦争を速報して大ベストセラーになった『日清戦争実記』(博文館)を素材にして、戦況報道(「本紀」/「戦争實記」欄)や各種の雑報で描かれた中国を検討した。

戦況報道について、代表的な戦役となる平壌陸戦(朝鮮戦場)、旅順半島の攻略(中国戦場)、そして黄海海戦(大規模の海戦)を対象に考察し、戦闘場面で表出した清軍イメージを分析した。平壌陸戦では、清軍の臆病なイメージが重点的に強調されたが、旅順半島の攻略になると、清軍の強い対抗も描くようになった一方、「野蛮」、「残虐」なイメージも強調されるようになっていった。また、黄海海戦の場合は、引き続き清兵の臆病的な行動に注目したが、その理由として、清兵の愛国心の欠乏に結びつけて論じる内容も見られるようになっていた。

次に、雑報の部分については、戦争中の清軍報道、そして戦争後の中国社会全般にわけて、それぞれ彙報、「地理」欄で掲載された記事を抽出し考察を行った。戦中の雑報で描かれた清軍は、自己本位、無秩序、戦闘力の低いイメージで批判され続けていた。その一方、戦後になると、雑報の内容は中国の風土、中国人全般へと転換し、そして論説でなく実地考察の内容を取り扱うようになっている。戦中の論調を踏襲して、「無神經なる事」、「保守主義」など中国批判が続けていたが、そのなかで、少数でありながら、中国に対する冷静的な論調もみられるようになっていた。

第一、二章の考察を踏まえて、第三章では、日清戦争期で中国に対する描き方を再度確

認するため、欧米人ジョルジュ・ビゴーの戦争報道画を考察してみた。明治以降の西洋文化を無批判に受容する日本人を皮肉な目で表現しているビゴーがイギリス大衆新聞に寄稿したデッサンの分析を行った。戦場写真のソース源を把握したうえ、ビゴー私蔵の『日清写真帳』及び関連の写真資料を参考にしながら、『ザ・グラフィック』へ投稿した戦争報道画で反映された戦争観を検討してみた。

まず、先行研究を参考にしながら、新聞資料及び『日清戦争写真帳』によって、ビゴーの従軍取材について追跡を行ってみた。そのなかから、ビゴーの報道画のベースとなった写真を確認できた。

次に、戦争以前におけるビゴーの風刺画作品をまとめて考え、そのなかで反映された国際観を把握してみた。日清戦争以前の作品から、日本が近代化の中における無選別な欧米吸収について、ビゴーが疑問を示したとうかがえる。ドイツ指向に伴った軍国化への転向について、ビゴーは風刺画によって警告を続けてきた。そして、戦争後になると、ビゴーは大量な画集を制作しはじめたが、内容は「一段と露骨」な日本風刺、そして、今までのない日英関係に対する猛烈な風刺に転向したという。西洋式を取り入れた軍隊について、ビゴーは戦前よりさらに辛辣な風刺を投げつけていた。

戦前戦後の作品と対照しつつ、最後にビゴーの『ザ・グラフィック』に投稿した報道画を考察した。報道画の情報性を確認したうえ、戦争報道画の内容をテーマごとに分類し、ビゴーが描いた戦争を具体的な検討した。結論として、彼は日本人絵師と違って、主に戦場の陰の一面に注目し続けた姿勢が判明した。特に、戦勝者である日本を描く際にも、負傷者の姿や戦病に関わった姿を重点的に描き、リアリティを以て戦争の残酷さを強調した。その背後には、ビゴーが日本の近代化さらに軍国化に対する強い懸念も反映されていた。

また、日露戦争期になると、ビゴーと同じく、日本人の中でも戦争を反省する論調が台頭した。それに従って、日本人の中では中国認識も次第に変化していく。第四、五章では、日露戦争直後に満鉄肝入りで中国東北地方を旅した夏目と、第一次世界大戦後に現地新聞社の招待により渡中した芥川の視線を検討した。素材は、中国に実際に旅行をした経験を認めた紀行文から抽出した。

第四章では、1909 年に夏目漱石が『東京朝日新聞』に発表した「満韓ところどころ」によって、当時日本の知識人が中国に対するまなざしを考察してみた。

夏目漱石は日露戦争の終結した五年後（1909 年）、満鉄が所在した中国の東北地域そして朝鮮に旅立っていた。強行軍の視察旅行を終えた直後から、「満韓ところどころ」を『朝日新

聞』に掲載しはじめた。紀行文のなかで過激な文章表現が多く、今でも問題視され議論されているが、同時期における『東京朝日新聞』の時事報道と対照した結果、「満韓」から漱石の鋭い洞察力が確認できた。

まず、漱石は批判的な精神を貫いて満鉄の様相を描いた。鉄道及び附帯事業の内容が欧米人向けで、一般民衆から遠ざけた現実を見出し、そして経費縮減に背けた盛んに設立した娯楽機関にも注目し皮肉的に表現した。

次に、戦跡めぐりについて、話題性のある場所をわざと避け、日本人だけでなく戦時下におけるロシア人のエピソードもいくつ提示し、戦争の悲惨さを表現しつつ戦争に対する反省を促していた。

さらに、中国そのものについて、漱石はさまざまな人物像を通じて、近代中国の現実を描き続けていた。ロシア馬車からアメリカタバコの話を通じて、彼は清政府や一部の知識層が性急に利権回収を試みた一方、本質となる莫大な外債問題、経営問題を無視した実態を批判していた。また、満鉄のそばで小鳥道楽に耽った民間人に注目し、漱石は中国における民族覚醒の必要性を提示した。

そして、十数年の後、いわば第一次世界大戦直後、芥川龍之介も中国の取材に旅立った。彼は帰国後漱石と同じく新聞紙に紀行文『支那游記』を掲載した。旅行の案内者から日程、移動ルートまで漱石と異なる一方、『支那游記』には「満韓」と類似した内容が多く現れていた。中国に対する最初の印象が中国のクーリーとの遭遇によって構成され、西洋式の舞踏場から中国趣味をもつ日本人までも同じく紀行文のなかで取り上げられた。さらに、国家の現状に無関心な態度を示す中国人は、「満韓」でみられた小鳥道楽の中国人姿から、『支那游記』でまた別の姿を以て再び登場していた。

第五章では、芥川が記した中国紀行である『支那游記』を主な研究素材にし、同時期における芥川の書簡、関連する文学作品、また友人などの思い出を手がかりにして、芥川の中国各地域に対する感想を把握した。その上で、各地域の歴史状況を具体的に考察しながら、『游記』について新たな検討を試みた。さらに、芥川が『游記』で重点をおいて描いた部分を分析し、彼が中国旅行で注目し、そして読者に伝えたいと思った内容が何だったのかを検討してみた。

芥川は西洋と中国そのものに着目し、それぞれ自分の見解を示した。中国伝統文化に対し愛着を抱きながら、終始「中国の現実」から目を離しておらず、西洋文化の浸入、伝統景観の消滅、ないし中国人自身の意識に注目し、「現代」の中国に存在した様々な問題を取り上

げている。

このように、戦争観の変化に伴い、日本人が描いた中国人イメージも変貌し続けた。日清戦争では、過熱な戦争支持に付随して、日本人のなかでは中国に対する否定的な感情が形成した。そのため、戦争報道で中国を侮蔑的に表現する現象が普遍し、日本の戦争戯画から戦争実記報道、さらに欧米人絵師の報道画との比較によって判明していた。その一方、戦後を迎えると、戦争反省にしたがって、中国に対する冷静な態度を呼びかける声も上がった。戦争に疑問を提示しつつ、一部の知識人は中国趣味や中国蔑視の両極から脱出し、中国の現実を見つめていた。そのなかで、代表的な知識人として漱石や芥川が挙げられるが、彼らがみたのは民族的自覚の必要性や中国背後に存在した欧米諸国の影響であった。近代西洋吸収に急いだ日本に姿を重ね合わせながら、彼らは現実の中国を辛辣に表現し続けていた。

本論文は、近代の各時期で中日両国が隣国に対してどのような観念を保有していたのかを、分析する第一歩に位置付けている。以上の考察をベースに、今後の課題として、多様なメディア報道を比較し、戦争時における民間の活動（祝勝大会）などから民間人の戦争観を確認しつつ、日本人の描いた中国についてさらに深く検討を行いたいと思う。また、近代中国の新聞雑誌について、その内容編集または受容度を考察したうえ、中国人の描いた日本についても検討を試みたいと考えている。